

テーマ：「女性の健康」後天性免疫不全症候群
エイズ孤児を増やさないプロジェクト
ケニア ムファンガノ諸島での取組みについて

1) はじめに

国際ソロプチミスト盛岡は「少年ケニアの友」を支援し続けて、本年は21年になります。

これまで、「少年ケニアの友」の支援活動については、

- ・2000年 札幌研修会：保健奉仕委員会の分科会で岸田袈裟さんの活動事例報告
- ・2001年 仙台研修会：岸田袈裟さんの活動事例報告
- ・2002年 札幌研修会：日本財団分科会 岸田袈裟さんの千嘉代子賞受賞報告

と、幾度かご報告しておりますので、個々の事例報告については割愛させていただきます。

(これまでの活動の一部は、SI盛岡のホームページ上でも紹介しております。 <http://homepage3.nifty.com/si-morioka/>)

昨年、2005年は「少年ケニアの友」活動支援20年で節目の年となり、ケニアの方々、岸田袈裟さんからぜひ現地に足を運び成果を見てほしいと要望を受け、2005年8月に10日間の日程で現地を視察しました。本日はその視察を中心にご報告いたします。

2) エイズ孤児を増やさないプロジェクト

現在サハラ砂漠以南のアフリカでHIV感染者は2,560万人と推定され、世界全体の推定感染者数4,030万人の6割に達しています。

そのような状況下で岸田袈裟さんから、ビクトリア湖に浮かぶムファンガノ島群にエイズ孤児が増え続けることに對し、「エイズ孤児をこれ以上増やさない」新プロジェクトをスタートさせるため、2004年11月、事前調査に行ってきたという報告がありました。

事前調査のメンバーは、岸田袈裟さんのほか、「少年ケニアの友」スタッフ 風間春樹（薬剤師）、「少年ケニアの友」会員 山中光茂（医師）、岸田大哉（オーストラリア州立医科大学の医学生、岸田袈裟さんのご子息）の4名でした。



私は、岸田袈裟さんもそう若くないし、新たにそんな危険で大変なプロジェクトに取り組まなくても、と思いました。しかし、このたびケニアに行ってきた、その考えも変わりました。

20年間岸田さんが取り組んできた、農村女性の意識改革につながる生活改善は「かまどの普及」に始まり、とうもろこしの皮で作った草履、湧き水の浄化槽の設置、薬用植物の植林、孤児院・奨学生の支援、と多岐にわたります。

ケニア視察の折には、それらの様子を見せてもらうため、すごい悪路の西ケニアの各地を四輪駆動のトラック（トヨタ寄贈）で、サンドイッチと水を持って終日走り回りました。どこに行っても岸田さんがいかに現地の人々の中に入り込み、いかに信頼され「岸田ママ」といわれ、愛され、慕われているかがわかりました。

そして素晴らしいことに、各地でコーディネーターとして成長したグループが育っていました。本当の援助とはこうあるべきだと思いました。人が育っているのです。彼女が新プロジェクトに心置きなく取り組もうとした気持ちがわかりました。

また、このたびのプロジェクトのスタッフには素晴らしい方々がそろいました。

・最初の奨学生でナイロビ大学を卒業した、ポール・ロベルト・ムバイ・ムヌヴェェさん。彼は条件のよい就職を断り、孤児たちのために働こうと岸田さんのもとにきました。

・保育士、介護士で岩手県出身の上野さつきさん。

・東京農大4年生の志野佑介さんは学校を休学して参加。

みなさん本当に素晴らしい方々でした。

3) HIV感染に悩むムファンガノ島群

○ビクトリア湖

九州の面積の2倍弱、琵琶湖の約100倍もあるというビクトリア湖に連れて行ってもらいました。夕方、大きな太陽が周囲を赤く染め、青い湖に沈む様は本当に見事でした。この湖上にエイズ感染に悩む島があるとは思えない美しさ

でした。

ビクトリア湖は、ケニア、ウガンダ、タンザニアの国境に位置している国際湖沼であり、その広さといい、その波の荒さといい、海ではないかと思うほどでした。そのビクトリア湖にあるのがムファンガノ島群です。

これらの諸島は昔は無人でしたが、欧州や日本に輸出される外来魚「ナイルバーナ」の漁場に近く、現在では現金収入を求めて、人が集まっています。

湖を航行するボートは、荒波にもまれ、また多く生息しているカバと接触して転覆死亡事故が絶えないそうです。このように交通の便も悪く、ケニア政府の行政的関わりも薄いため、エイズ対策を含め、特に医療面における不備は他県より大きく遅れ、HIV拡散を防げない大きな要因になっています。

○感染防止プロジェクト

感染率は年々増加の一途をたどり、孤児も増える一方。実地調査を元に立てられた計画により、日本の外務省から平成17年度日本NGO支援無償資金の協力を得て、船を2艘購入しました。島に渡り、本格的に地元教員組合等と連携しながら感染防止のための医療、教育活動、母子感染を重視した各家庭個別訪問指導を進めるとともに、地域住民自身の手によるプログラム推進をめざし、地元リーダー、ソーシャルワーカーの育成を進めているそうです。

実際には現地では、さまざまな問題が山積しています。

- ・ルオ民族特有の習慣、「ワイフィンヘリタンス（兄弟の妻を相続する制度）」がある
- ・孤児や未亡人が生活苦から売春行為を行う
- ・コンドーム私用は売春を促すという教会の指導があった
- ・コンドームにHIVウィルスが塗ってあるというデマが流れて政府が無償で配布したコンドームが大量に海に捨てられた
- ・HIV検査をしても、この島ではなんの治療も受けることができないので、特に売春婦たちは結果を知っても意味がないと考え、検査の受診を拒否する、

など、実際には種々の障害がありプロジェクトの推進は大変なようです。

6000人の島民の4割にもものぼるHIV感染率に、岸田さんは悩まされていましたが、持ち前の彼女の根気ががんばっていました。

○岸田袈裟さんとケニアの人々

ビクトリア湖畔のレストランで、州知事と夕食をご一緒させていただいた折に、「岸田ママは本当に素晴らしい方だ、20年前から今まで、実に根気強く、住民の手の届く実践を通してむらを受愛することを教え、種々な面から、住民教育、人づくりをしてこられました。私は岸田ママは西ケニア駐在の日本大使だとなげな思っています」と賛辞を述べておられました。



4) 千嘉代子賞受賞のその後

千嘉代子賞の賞金をもとにして、岸田さんは、エンザロ・ドリーム・ライブラリーを建てました。

子どもたちと一緒にペンキを塗ったり、トビラに絵を描いたり、すばらしい図書館ができて、大人も子どもも終日利用しているようです。SI盛岡も100冊英語の本を寄贈してきましたが、まだまだ内容は充実していません。今後も手伝いたいと思っています。



(上) 図書館はレンガ造り。扉にはカラフルな絵が描かれている。

(下) 図書館の開館式に集まった地元の子どもたち。歓迎の歌を披露してくれた。